



玉木 溝口さんは2013年に

『性と柔』（河出ブックス）という本を上梓され、女子柔道が如何に男子柔道から差別され続けてきたことを告発されました。以来女子スポーツの弱い立場を改める「物言うアスリート」として活躍され、フランス柔道ナショナルチームのコーチとして、彼我の違いから日本の柔道界の暴力問題や利権の構造も批判してこられました（『日本の柔道フランスのJUDO』高文研 15年）。それから約10年。日本の柔道界やスポーツ界は変わりましたか？

溝口 柔道界は確かに改善されました。私の時代には女子の黒帯には白線が入ってましたが、今では男子と同じ黒帯になりましたが、スポーツ界全体としては、まだまだ変えなきゃならないことが多いですよね。

玉木 それはどういう点で？  
溝口 10年前は柔道界もスポーツ界も本当に酷い状態でした。大坂桜宮高校バスケットボール部のキヤプテンが監督の暴力や暴言のパワハラに耐えかねて自殺した事件

（12年12月）があり、続けて女子

柔道日本代表の選手たちが監督のパワハラやセクハラを告発したんですね。すべて教育や指導の名の下に行われていたことで、社会的にも非難の声が起るなか、山口香さんなど女子柔道黎明期の不遇な時代を過ごされた方が、まだそんな馬鹿なことをやってるのかという怒りの声をあげ、15人の日本代表候補選手たちの主張を応援したのでした。

玉木 そのときは溝口さんも女子選手たちを支援する側に立たれましたが、女子選手の不遇な時代というのは……？

溝口 私たちの現役時代には女子の月経の時期は気合いで移せなくて、馬鹿なことを言われたモノです。その時期はやっぱり力も入りにくいけど、今日はメンスで……と言うと、またサボってるのかと言われたり、そんな目で見られることもありました。今でも女子の長距離ランナーのなかには体重を落とすとタイムが速くなるので、無理な減量と過度なトレーニングから月経が止まっているアスリー

トは大勢います。それに対する男性コーチの無理解もありますね。

玉木 加えてかつての柔道界は、暴力も酷かったのですか？

溝口 妙な話になりますが、昨年末に私はコロナに感染してパルスオキシメーターが90を切る中等症にまでなりました。自分でクルマを運転して病院へ行き、「息が苦しいけど耐えられます」と言ったら、お医者さんに「凄いですね」と驚かれた。その時の感覚は柔道の稽古で絞め技を食らって半落ちの状態で、柔道の稽古ではそんな生死をさまようほどの行為を鍛錬だといってやられていたのです。だからコロナに耐えられたなんて洒落にもならないですが、柔道界は体育界系で一番激しい苦行で、それに耐えればどんな不条理も乗り切れるという精神論の世界でした。その一方で柔道事故が次々と起こり、20年間で約120人の子供たちが稽古中に亡くなっていたのです。

玉木 そのほとんどは男子ですよね。

溝口 そうです。柔道事故の90%

以上は男子の事故で、女子の代表選手たちのパワハラ告発問題は、

多く一般の女子柔道選手の問題と同時に、男子選手の問題でもあったわけですね。そして女子代表選手たちの告発の結果、監督も全柔連（全日本柔道連盟）の強化本部長も辞任。上村（春樹）会長も退任。

上村会長はモントリオール五輪の金メダリストで講道館の館長。柔道界の天皇のような存在で、逆らえば破門にされる怖れもあった権力者でした。が、女子選手たちの告発をきっかけに、国の助成金の不正使用問題なども発覚して退任。IJF（国際柔道連盟）の理事も辞任。そこから柔道界は一新され、男子代表チームの監督も井上（庚生）さんが体罰をなくし、選手の声聞き、選手に寄り添う選手ファーストの指導を徹底され、その結果オリンピックでの金メダル獲得も伸びたのです（12年ロンドン1個、16年リオ3個、21年東京9個）。

玉木 しかし柔道界は、毎年4月29日の昭和の日に日本武道館で開かれる日本選手権は男子のみ。女